

## は し が き

北海道東部の一郭に京都大学北海道演習林が設定されてから30年余りの歳月が流れた。同演習林は標茶町に約1400ha、白糠町に約880haの面積を有しており、昭和24年に設定された標茶区は設定当時全域にわたって各種の広葉樹林が成立していた。以来これらの広葉樹林にかえてカラマツ、トドマツ、アカエゾマツなどの針葉樹の造林が進められ、マツ類を主とする種々の外国樹種の導入が試みられる一方、広葉樹林の改良、育成についても数多くの試験、研究が行われてきた。標茶区より1年遅れて設定された白糠区は天然生のトドマツが多く、これらの森林について択伐作業や皆伐によるトドマツ、エゾマツなどの人工林の造成が行われ、両区にわたって教育・研究の場としての森林内容の整備充実が図られてきたのである。さらに林学教育のみならず、これら森林を対象とした巾広い様々の研究・教育の場としての価値が次第に高められて今日に至っている。

諸施設も漸く整備され、新しく飛躍をとげようとするこの時に当り、先人たちが育成・管理に並々ならぬ苦心・努力を払ってこられた森林の現在の姿、推移等を記録しておいてはどうかという話が現地からもち上り、これまでに勤務された方々にも呼びかけて、論文、資料を投稿願うことにした。これが同演習林の将来像を築くための一助ともなればと念願するものであり、北海道演習林開設30周年に因むものとして演習林集報記念号として刊行するものである。なお一般には内容の重複を避け、各論文の連絡をはかるため、編者の責任において原稿に手を加えることが行われるが、オリジナルな論文には、各研究者の個性的営為、いわば研究者の世界観が凝縮されているとの考え方もあるので、これらの作業は一切行わず、各執筆者の責任において全文そのまま掲載するという方法をとったこととお断りしておきたい。

また種々の理由により、今回掲載できなかった論文ならびに北海道演習林をめぐる諸問題、将来の方向についての総合討論などは近い機会に公表する予定であることを附言しておく。

本記念号を発行するに至るまでの様々の段階において、演習林の教職員各位には特に御援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表したい。

昭和57年1月

編者を代表して

和田 茂彦